羅針盤２００号記念企画

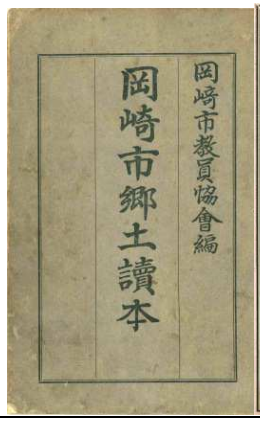
郷土読本「おかざき」のあゆみ

〇郷土読本の歴史

戦前から発行されていた郷土読本であるが、現在の形に近い郷土読本は、戦後教育の花形として登場した社会科の時代にさかのぼる。岡崎市では、県下に先駆けて郷土読本の編集が行われた。その目的は、次の２点が挙げられる。①子どもに切実感をもたせ、具体的・実証的な学習に取り組むことができるようにすること。②社会事象を教材化する際の労力を軽減し、いわゆる「はいまわる授業」からの脱却を図る。この２点を目指し、社会科の本質である「子どもたちの身近な社会事象を基にした」授業に迫ることを目的に昭和２６年春から読本の編集が始められた。この記念企画では、過去の郷土読本を振り返り、岡崎市の変遷の様子と社会科部の努力の結晶をお伝えできればと思っている。

〇戦前の郷土読本は

岡崎市総合学習センターに所蔵されている過去の郷土読本の中で、確認できる最古のものは、1930（昭和５）年発行の『岡崎市郷土讀本』である。戦前の色が濃く、巻頭には天皇陛下の行幸といった内容が書かれている。しかし、第２章からは、地理・歴史・自治と、現在の社会科にも十分通じる内容が掲載されており、貴重な資料となる。歴史分野では、「本多忠勝」といった人物の紹介も記されている。



降客で賑つてゐて、一年間の乗降人員は各三十七八萬人に達してゐる貨物の積下しも多く發送貨物の主なるものは綿糸綿織物綿石材石製品菓子等で到着貨物の主なるものは綿パルプ樽樓瓦等である岡崎驛

岡崎驛と東岡崎驛

「岡崎市郷土讀本」1930（昭和５）年 10 月発行　の一節
小學校は梅園・三島・連尺・投・廣幡・岡崎・美合・男川と師範付属との９校があつて約 8300 人余の兒童が樂しく勉強出來るやうになつてゐて、その設備も他の都市に劣つてゐない。

〇戦後初の郷土読本

先述の通り、1951（昭和 26）年から編集活動を行った郷土読本が発行されたのは 1952(昭和 27)年のことであった。小学校編である『私たちの岡崎』は、150 ページにもおよび、戦後の混乱期に編集されたものとしては大変貴重で、現職教育委員会の教育にかける熱意の高さを感じさせるものであった。また、同時に中学校編である『岡崎の姿』も発行されている。下記の一節のように、電話器の台数など、緻密な調査が行われており、編者の苦労の跡がうかがえる。

「私たちの岡崎」小学校編　1952（昭和 27）年４月発行　の一節
六、電話局　岡崎市の電話器数は昭和 26 年 12 月末現在で 2209 台設置されています。100 人当り２．４台の割合です。世界一のアメリカのサンフランシスコは 100 人当り 50 台です・・・

各地の電話器数と100人当り電話器数（26年3月）

地　名	電話器数	100人当り電話器数
岡　崎	2.209	2.4
名古屋	32.512	3.1
豊　橋	3,769	2.6
一　宮	1,991	2.9

○復興期の郷土読本

その後、町村合併による市域拡大をきっかけとして、1955（昭和 30）年に『新しい岡崎』（小学校編 150 ページ・中学校編 160 ページ）が発行された。この郷土読本には、六ッ美村の編入の状況と、岡崎市の発展の様子が書かれている。「戦災復興モデル都市」に指定され、新しい姿を見せる岡崎の姿が丹念な調査活動に基づいて掲載されているのが特徴的である。

「新しい岡崎」小学校編　1955（昭和 30）年３月発行　の一節

行きかうバスや電車、後から後から続く人々、見事なシルバーアーケード、美しくかざりつけをした商店、色とりどりのネオン、このにぎやかな康生町の通りから、1945（昭和 20）年の戦災で焼け野原になった町をおもいうかべることはむずかしいことです。・・こんなに大きないたでをうけたのに、1951（昭和 26）年には、国から戦災復興モデル都市とされるほどに復興が進みました。その早かったわけとして、次のことが考えられます。

戦 災 区 域 図

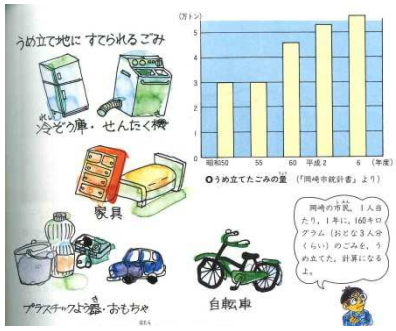
○郷土読本から副読本へ

1992（平成４）年発行の小学校郷土読本は、位置付けが「副読本」となり、教科書を補完する（置き換えるといっても過言ではない）ものとなり、サイズが A５から B５に拡大され、資料や写真が大変見やすくなっている。さらに、1996（平成８）年発行の小学校副読本からは、全編がカラー化されている。この副読本では、カラー化の利点を十分に生かし、写真はもちろん、地形図では山地・平野の色分けがなされるなど、イメージが描きやすいものとなっている。

副読本「おかざき」小学校編４年用　1996（平成８）年発行　の一節

うめ立て地で働くおじさんの話

毎日たくさんの燃えないごみが運ばれてきます・・・ガスのぬいてないスプレーかんがよくあるので、あなをあけてからうめるよう・・・ごみは、どんどんふえているので、使えるものは、大切に使ってほしいです。ごみの出し方にも、気をつけてほしいです。



○旧額田町のふるさと読本

岡崎市と合併前の最後の「ふるさと読本」が発行されたのは、2002（平成 14）年の３月のことである。295 ページにもおよび、小学校３・４年の「社会科副読本」の位置付けから、「総合的な学習にも対応する学習読本」「額田町民のための生涯学習読本」と発展したものである。猪垣などの郷土の遺産のみならず、自然豊かな額田地区の「ホタル」や「ネコギギ」「アマゴ」といった生物の生態まで記されている。この内容は岡崎市社会科部のホームページにも掲載されており、閲覧することができる。

○先人から、今の岡崎を学びたい

紙面の都合上、十分に紹介することはかなわなかったが、私たちの先輩が「足で稼ぐ社会科」の先生として編集に携わってきた郷土読本の価値の一端を感じることができたのではないかと思う。これら過去の読本を「資料」として用いることで、岡崎の変遷を学ぶことができるのも、また魅力の一つといえるであろう。先輩の努力に敬意を表しつつ、今のおかざきっ子のために活用させていただきたい。

○参考文献
・泉　岡崎のミニ教育史・教育博物館　ふるさとシリーズ編集委員会　編　1998（平成 10）年発行
・岡崎の教育　－この３０年－　新学制三十周年記念事業記念誌編集部会　編　1978（昭和 53）年発行
・郷土読本各種　岡崎市総合学習センター図書館蔵